

ジャコバイト辞典 (6)

浦田 早苗

M

 **MacLean, Hector, Sir, 5th Baronet of Duart (1703-1750)** — 第5代
デュアルテ男爵、ヘクター・マックリー

父の第4代デュアルテ男爵が1715年のジャコバイトの乱にジャコバイト側で参戦し1716年に死亡すると、父の後を継いでマックリー氏族長となる。1721年からフランスで育ち、学業を修め、1726年からは亡命ジャコバイトのエージェントとしてフランスとの折衝にあたる。1745年の乱では蜂起直前に逮捕されロンドン塔に収監されるが、フランス国籍ということで1747年に釈放された。



 **MacLeod, Norman (1705-1772)** — ノーマン・マクラウド

スコットランド・ローランドのマクラウド氏族長。1745年のジャコバイトの乱に際しては、政府側につき700名の氏族を率いて1745年12月23日のインベルリー(Inverurie - アバディーン北西12マイル)の戦いに参戦したが、70名の死傷者を出しジャコバイト軍に敗北した。カロデンの戦いには参戦しなかった。





MacPherson, Ewan, of Cluny (1706-1764) — イワン・マクファーソン

スコットランド、マクファーソン氏族長で、もともと政府軍側であったが、1745年の乱ではジャコバイト側で参戦した。プレストンパンズ、クリフトン、ファルカークの戦いに300名の氏族を率いて大佐として戦い勇名を馳せた。カロデンの戦いには加わらず、その後はチャールズ・スチュアートの亡命宮廷に仕えた。



Manchester Regiment — マンチェスター連隊

1745年の乱でジャコバイト軍が11月28日に入城したマンチェスターで新兵公募を行い、組織された300名の連隊。Francis Towneley 大佐が率いダービーまで進軍したが、ジャコバイト軍のスコットランド撤退の際に、カーライルでの籠城を命じられ、後に127名が捕虜となり、15日ほどの地下牢に水も食料も与えられずに一週間押し込められた後処刑された。



Mar, 6th Earl of, John Erskine (1675-1732) — 第6代マー伯爵、ジョン・アースキン

1689年父から伯爵位を継承したスコットランド貴族。イングランド・スコットランド連合後、スコットランド代表貴族としてウエストミンスターに入り官職を得る。ジョージ1世に忠誠を誓うが、トーリであったため官職を剥奪されると1715年のジャコバイトの乱の際、蜂起した。1715年の乱後は、ジェームズ・エドワードの亡命宮廷に仕えた。



 **Maria Theresia von Österreich (1717-1780)** — マリア・テレジア

カール 6 世の長女。兄が夭折したため、ハプスブルク家を相続した。帝位には夫のロートリンゲン公フランツが就いたが、マリア・テレジアはハプスブルク家当主の象徴であるオーストリア大公となる。1780 年に死亡するまでに 5 男 11 女をもうけ子供たちの結婚を外交に利用した。フランス革命で断頭刑に処せられたマリー・アントワネットの母でもある。



 **Marie-Victore, Princess de Rohan (1779-1836)** — マリー・ヴィクトワール

チャールズ・エドワードとグラスゴウのジャコバイト、クレメンティーナ・ウォーキンショーとのあいだの私生児シャルロッテの娘。チャールズ・エドワードの孫にあたるが、その存在は長い間隠されていた。成長すると、彼女は中世のブルターニュ公爵にまでさかのぼるフランスの名門貴族ローハン家に嫁ぎ 3 人の子供をもうけた。



 **Mary of Modena, Mary Beatrice (1658-1718)** — メアリ・ベアトリス

1673 年にヨーク公ジェームズと結婚したイタリア・モデナ公女。1682 年までに 1 男 3 女をもうけたが、すべて夭折していた。1685 年にジェームズが即位すると、ジェームズ 2 世妃となる。1688 年にフランス亡命後は、サンジェルマン・アン・レイ城を居城とし、1692 年にジェームズ 2 世の末子ルイサ・マリア・テレサを出産した。





Mary II of England (1662-1694) — メアリ 2 世

ヨーク公の長女であったが、母アンの強い希望から、時の国王チャールズ 2 世の命によってプロテスタントとして育てられた。15 歳でネーデルラント総督ウィレムと結婚するが、三度の妊娠も流産または死産に終わり、生涯に渡り子供を持ってなかった。1689 年からメアリ 2 世としてウィリアムと共に英国を統治し、戦場を駆け巡っていたウィリアム 3 世以上に政治に関与したが、1694 年天然痘のため崩御した。



Massacre of Glencoe (1692) — グレンコーの虐殺

ウィリアム 3 世によるスコットランド・ジャコバイト一掃を目的とした、グレンコーのマクドナルド氏族への虐殺。族長以下 38 名が殺害され、子供を含む 40 名が焼き殺された。背景には氏族間の対立も含まれていたが、国内外で問題視され、ウィリアムの人気を著しく貶めた。



Maxwell, William, 5th Earl of Nithsdale (1676-1744) — 第 5 代ニス

デール伯爵、ウィリアム・マクスウェル

スコットランド貴族でカトリックのジャコバイト。1715 年の乱ではトマス・フォスター軍に加わり、プレストンの戦いで捕らわれ、反逆罪により死刑判決を受けた。しかし、妻ウィニフレッドの助けにより処刑前夜にロンドン塔牢獄を脱獄し、ローマに逃亡後亡命スチュアート宮廷に仕え、妻と幸せな余生を送った。



 **Maxwell, Winifred, Countess of Nithsdale (1680-1749)** — ニスデー

ル伯爵夫人、ウィニフレッド・マクスウェル

初代ポーウィス侯爵の娘で第5代ニスデー伯爵夫人。1715年のジャコバイトの乱に参戦し捕まった夫の処刑免除をジョージ1世に嘆願したが、適わないとわかると処刑前夜に夫を自分のメイドに変装させロンドン塔から脱獄させた。晩年は、ローマでチャールズ・エドワードの愛人クレメンティーナに仕えた。



 **Middleton, Charles, 2nd Earl of Middleton (1650-1719)** — 第2代ミ

ドルトン伯爵、チャールズ・ミドルトン

1688年の革命勃発当時のイギリスの国务大臣で、1693年以降ジャコバイト主席補佐官としてジェームズ2世、ジェームズの死後はジェームズ・エドワードに仕える。1708年のジャコバイト・クーデターの首謀者でもあり、1715年の乱でも準備段階で多大な助力をした。フランス政府から年金を受け、1719年に死亡した。



 **Moir, James, 4th Laird of Stoneywood (1710-1782)** — 第4代ストー

ニーウッド領主、ジェームズ・モア

アバディーンシャーの地主。300名の騎兵を率いて1745年の乱全般で活躍した。歩兵が主のジャコバイト軍にあって、彼の率いる竜騎兵はカロデンの敗北でのハイランダーの逃避路をつくった。その後亡命先のストックホルムで商人として成功し、恩赦を受けると1762年にストーニーウッドに帰郷し、余生を全うした。



 **Monmouth, 1st Duke of, James Scott (1649-1685)** — 初代モンマス公爵、ジェームズ・スコット

チャールズ2世と愛妾ルーシー・ウォルターとの間に生まれる。1685年6月、カトリックであったジェームズ2世の即位に異を唱え、自らのプロテスタントによる王位継承を掲げ、イングランド南西部で蜂起する。反乱は1ヵ月足らずの内にジョン・チャーチルによって平定され、命乞い空しくモンマス公はロンドン塔で断頭刑に処せられた。



 **Murray, Alexander (1712-1778)** — アレクサンダー・マリ

エリバンク卿の弟で、1747年に蜂起を画策したジャコバイト。ジョージ2世を誘拐し、その混乱のなかプロイセン陸軍の元帥となっていたジャコバイト、ジェームズ・エドワード・キース率いる反乱軍がスウェーデンからの援軍を加えスコットランドで蜂起するという、いわゆるエリバンク陰謀を提唱した。しかし、キースの兄マリシャル伯爵は、この時すでにチャールズ・エドワードを見限っていたため計画は未遂に終わった。



 **Murray, Lord George (1694-1760)** — ジョージ・マリ卿

スコットランド有力貴族アソル公爵の六男でジャコバイト。1715年の乱の後、国外追放とされるが、1739年にジョージ2世に忠誠を誓い、許され帰国する。1745年、再び翻意しチャールズ・エドワード軍に加わり中將を任命され、軍の実質的指揮官となる。ダービー進撃後、冬を前に一時的にスコットランドに退避することを提案した人物。また平坦なカロデンを決戦場にすることに強く反対した指揮官でもあった。



 **Murray, James, Earl of Dunbar (1690-1770)** — ダンバー伯爵、ジェームズ・マリ

第5代ストルモン子爵の次男で、1719年以降亡命ジャコバイト宮廷に仕えたスコットランド貴族。ジェームズ・エドワードとクレメンティーナ・ソビエスカとの婚儀を調えた人物として知られる。1746年にフランスに舞い戻ったチャールズ・エドワードの機嫌を損ね解任。その後アビニョンに移り晩年を過ごした。



 **Murray, John, of Broughton (1718-1777)** — ジョン・マリ

サー・デビッド・マリの息子のジャコバイト。1739年頃からチャールズ・エドワードとスコットランド・ジャコバイトの連絡役を務め、フランスからの援助も取り付けた。45年の乱ではチャールズの秘書官に任じられたが、捕らわれるとジャコバイトを裏切り、ロヴァット (Lovat) 卿が彼の証言により処刑された。



 **Murray, William, Marquess of Tullibardine (1689-1746)** — トリバルディン侯爵、ウィリアム・マリ

初代アソル公爵の次男のジャコバイト。1715年の乱ではマー伯爵と、1719年の乱ではマリシャル伯爵と共に戦った。1745年の乱ではチャールズ・エドワードと共にスコットランドに上陸した7名の従者の一人。ジャコバイト侯爵位を授与されたが、1746年のカロデンの戦いで捕われ、反逆罪によりロンドン塔で処刑された。



 **Muti Palazzo** — ムッティ宮

ローマ、Santi Apostoli 広場に面した館。ローマ教皇クレメント 11 世がジェームズ・エドワード・スチュアートとクレメンティーナ・ソビエスカに与え、ジャコバイトの亡命宮廷となった。チャールズ・エドワードとヘンリ・ベネディクトがこの館で誕生し、ジェームズとチャールズが亡くなった館でもある。



九三

William Hogarth 画「March of the Guards to Finchley」1745 年のジャコバイトの乱に際し、ロンドンの守備に向かう英国連隊の軍紀の乱れを風刺している

N

Nairn — ネアン

カロデンの戦いに備えてカンバーランド軍が陣を張った町。戦い前夜、ジャコバイト全軍の兵によるネアンへの夜襲が計画されたが、急仕立てのこの作戦では、この地に疎い案内役と夜間行軍の経験のないフランス正規軍が足手まといになり進軍は鈍かった。空が白み始めたとき、ジャコバイト軍は未だ敵陣 3km 手前の地点にあり、司令官マリ卿はやむなく全軍を引き返さざるを得なかった。



Nairne, 3rd Lord, John Murray (1691-1770) — 第3代ネアン卿、ジョン・マリ

アソル侯爵の孫のジャコバイト。1715年のジャコバイトの乱に参戦し、プレストンの戦いで捕らわれ反逆罪による死刑判決を受けたが、その後恩赦により爵位没収の上で釈放された。1745年のジャコバイトの乱の際も蜂起したが、カロデンの戦い敗北後スウェーデンに亡命した。晩年は気難しい性格になり、チャールズ・エドワードと仲たがいがいた。



 **Newcastle-upon-Tyne, 1st Duke of, Thomas Pelham-Holles (1693-1768)** — 初代ニューカッスル公爵、トマス・ペラム・ホールズ

ウィッグの政治家。ケンブリッジ大学クレア・カレッジで学び、ウォルポールの盟友でヘンリ・ペラムの兄。要職を歴任し、英仏7年戦争勃発時の首相でもあった。1718年にジョン・チャーチルの孫レディ・ヘンリエッタ・ゴドルフィンと結婚するが、彼女の健康が優れず、子供はできなかった。1754年から62年までの英国の政務を担う。



 **Norris, John (1671-1749)** — ジョン・ノリス

1708年から下院議員を兼任した海軍提督で、スペイン継承戦争に従事し、ジョージ1世にも仕えた。北方戦争におけるバルト海艦隊司令官であったが、英仏海峡守備艦隊も指揮し、1716年のスコットランド進入計画などの多くのジャコバイトのクーデターや反乱に対処し英国を守備した。1734年から英国海軍司令長官を務めた。



 **North, William, 6th Baron North (1678-1734)** — 第6代ノース男爵、ウィリアム・ノース

名うでのジャコバイト議員。議会でジャコバイトよりの過激な発言をくり返していた。アタベリ陰謀事件(1722年に予定されていたジャコバイト蜂起計画)ではアタベリと共に反乱軍を率いる予定であった。陰謀発覚後、国外追放に処せられるとジェームズ・エドワードの亡命宮廷に仕えジャコバイト伯爵に叙爵される。



 **Nottingham, 2nd Earl of, Daniel Finch (1647-1730)** — 第2代ノットtingham伯爵、ダニエル・フィンチ

1673年から下院議員でチャールズ2世の下で海軍大臣を務めたが、ジェームズ2世に冷遇され、ウィリアム側につく。ウィッグと一線を画す厳格なトーリ議員として名を馳せる。ウィリアム3世、アン女王の下で国務長官を歴任し、1682年に伯爵位を受ける。ジョージ1世の即位によって枢密院議長に就任するが、1716年政界から引退した。



カロデンの決戦場跡

O

 **O'Brien, Charles, 5th Viscount Clare (1673-1706)** — 第5代クレア子爵、チャールズ・オブライアン

1688年の革命後、アイルランドでの反革命戦争(1688-1691年)をジャコバイト軍竜騎兵連隊大佐として戦い抜いた貴族。チャールズ2世、ジェームズ2世の侍従長を務めたヘンリ・バークリーの娘シャルロッテにジェームズの亡命宮廷で出会い結婚して2人の息子をもうけた。フランス亡命後はフランス軍に身を投じた。



 **O'Brien, Charles, 6th Viscount Clare (1699-1761)** — 第6代クレア子爵、チャールズ・オブライアン

第5代クレア子爵の息子で、フランス軍人。父の竜騎兵連隊をフランス軍大佐として指揮し、1718年スペインと戦う。その後ポーランド継承戦争では1734年のフィリップスバークの攻城戦、オーストリア継承戦争では、1743年のデティンゲンの戦い1745年のフォントノイの戦いで功績を挙げ、1751年フランス陸軍元帥まで上り詰めた。





O'Sullivan, John William (1700-1760) — ジョン・ウィリアム・オサリバン

1745年の乱最大の決戦の地を、両軍の間にあるカロデン・ムアに定めたチャールズの副官。オサリバンはもともと軍の主計畑一筋で、戦闘経験のほとんどないアイルランド人であった。チャールズ軍の実質的指揮官マリ卿が後に、「湿地帯カロデンほどハイランダーにとって戦いにくい地はなかったであろう」と述懐している。



Ogilvy, David, 5th Earl of Airlie (1725-1803) — 第5代エリー伯爵、ディヴィッド・オグルビー

1745年の乱でチャールズ・エドワードの側近として参戦したスコットランド貴族。カロデンの戦いで捕らわれたが、フランスの国籍を有していることを理由に釈放され、その後フランス軍に投じ、オグルビー連隊の活躍から「麗しのスコットランド人」と呼ばれた。1778年に恩赦を受けスコットランドに帰国し、余生を送った。



Ogilvy, Lady Margaret (1724-1757) — レディ・マーガレット・オグルビー

第5代エリー伯爵の妻。1745年の乱では夫と共にチャールズ・エドワード軍に従軍し、カロデンの戦い後捕らわれ反逆罪により死刑判決を受けた。エディンバラ城収監中に洗濯女に変装して牢獄から脱獄し、フランスに渡る。1751年に出産のため一時スコットランドに帰国後、フランスに戻り33歳の短い人生を終えた。



 **Oliphant, Laurence, elder (1691-1767)** — ローレンス・オリファント
スコットランド、ガスク (Gask) の大地主のジャコバイトで 1715 年の乱、また息子と共に 45 年の乱に参戦した。1745 年 9 月 11 日チャールズ・エドワードが彼の館で朝食をとり、記念にひと房の髪をおいていった。カロデンの戦い後はフランスに亡命したが、後に恩赦を受けてスコットランドに帰郷し、余生をそこで過ごした。



 **Oliphant, Laurence, younger (1724-1792)** — ローレンス・オリファント
スコットランド中央部に位置するガスク村の大地主で、1732 年に父から家督を継いだジャコバイト。1745 年の乱では父と共に、ファルカークの戦い、カロデンの戦いに参戦した。カロデンの戦いの敗北後 1746 年 10 月にスウェーデンに亡命したが、1763 年に恩赦を受けスコットランドに帰郷する。



 **Ormonde, 2nd Duke of, James Butler (1665-1745)** — 第 2 代オーモンド公爵、ジェームズ・バトラー

1688 年祖父から公爵位を継いだアイルランド軍人で、1711 年スペイン継承戦争英国陸軍総司令官となる。1715 年の乱ではイングランド西部で蜂起する予定であったが、逮捕状に恐れをなして、蜂起直前にフランスに亡命した。その後、スペインの庇護下で亡命生活を送り、1719 年の乱にジャコバイト側指揮官として参加した。



P

Peace of Ryswick (1697) — ライスワイクの講和

ファルツ選帝侯領の相続をめぐり、フランスとドイツ (神聖ローマ帝国、ドイツ諸侯国)、イギリス、オランダ、スペイン、サヴォイアとの間のアウグスブルク同盟戦争 (1688-97年) 終結の講和。これによりフランスはウィリアム3世を正式な英国国王として認め、以後亡命中のジェームズ2世を援助しないことが約束された。



Pelham, Henry (1694-1754) — ヘンリ・ペラム

ニューカッスル公爵の弟。1715年のジャコバイトの乱には政府軍志願兵としてプレストンの戦いに従軍し、1717年から下院議員でウィッグの一人として活躍。1724-30年陸軍大臣、1730-43年陸軍主計長官を務めた。ウォルポールの退陣後は、1743年から亡くなる1754年まで首相としての役割を果たした。政治手腕の評価は兄より高い。



 **Perth, Dukes of** — パース公爵位

第4代パース伯爵、ジェームズ・ドラモンに与爵されたジャコバイト公爵位。1696年からジェームズ2世の亡命宮廷に仕え、1701年に公爵に叙された。ドラモンの領地は1750-1784年まで英国政府に没収されたが、1784年に子孫のジェームズ・ドラモン大尉に返され、彼は同時にメルフォート伯爵に叙された。



 **Pitsligo, 4th Lord Forbes, Alexander Forbes (1678-1762)** — 第4代

ピッツライゴ・フォーブス卿、アレクサンダー・フォーブス
1715年のジャコバイトの乱でスコットランドのブレーマーで蜂起したマー伯爵の孫のジャコバイト。1715年の乱に参戦後一時ローマに亡命するが1720年に恩赦を受けスコットランドに帰国。1745年の乱にも67歳の高齢にもかかわらず100名の兵を率い参戦した。



 **Pitt, William, 1st Earl of Chatham (1708-1778)** — 初代チャタム伯爵、ウィリアム・ピット

大英帝国の礎をつくるウィリアム・ピットの父。1735年、下院議員となる。ウィッグと一線を画し政府のハノーヴァ寄りの政策を常に批判し、ウォルポールの論敵でもあった。1746年陸軍主計長官に任じられるとジャコバイトの乱の後処理に手腕を発揮し、ジョージ2世、3世下で1756-61年国務大臣、1766-68年首相を務める。1766年にチャタム伯に叙された。





Pompadour, Madame (1721-1764) — ポンパドゥール夫人

本名、ジャンヌ・アントワネット・ポワソン。父はオルレアン侯爵(幼少のルイ 15 世の摂政)の会計士。1741 年に結婚するが、1744 年にその美貌がルイ 15 世の目に留まり、彼女はボンパドゥール侯爵夫人の称号を与えられて夫と別居し、1745 年 9 月 14 日正式に公妾として認められた。ボンパドゥール夫人は、カロデンの戦い後半年もの逃避行を続け 1746 年 9 月にフランスに舞い戻り当時の英雄ともて囃されたチャールズ・エドワードをフランス宮廷に招待し、ルイ 15 世とともに晩餐会でもてなした。しかし、チャールズはフランス国王妃が彼の母の従姉妹であったこともあり、彼女の出自の低さにボンパドゥール夫人に対する軽蔑の念を隠そうとせず、彼女はこの日の屈辱を決して忘れなかった。チャールズは彼女が持つ政治、外国に対する影響力を見損ねており、以後ジャコバイトにフランスが援助する事が無くなったのである。



Portland, 1st Earl of, William Bentinck (1649-1709) — 初代ポートル

ンド伯爵、ウィリアム・ベンティック

ウィリアム 3 世の寵愛をうけた貴族で、1688 年のウィリアムの英国侵攻の準備を調えた人物。革命後、ウィリアムによってイングランド伯爵に叙爵される。王室御寝所長官を務め、ポイン川戦やランデンの戦いに参戦した軍人でもあった。ネーデルラントの国益を第一に考え、しばしば英国人の大臣と対立した。ネーデルラント人のアルベマール卿 (Lord Albemarle) の台頭を妬み、1699 年に引退する。



Preston, Battle of, 14 November 1715 — プレストンの戦い

1715年のジャコバイトの乱は、イングランド北部のトマス・フォスターと南西部オーモンド公爵及びスコットランドのマー伯爵の協同作戦であった。しかし、1715年10月6日ワークウォースで挙兵したフォスターはスコットランドのケルソーでマー伯軍を一旦待ったが、このときすでにオーモンド公爵はフランスに亡命していたことを知らず、イングランド南西部の蜂起を期待し無謀にも単独で軍を南下させてしまう。フォスターは11月12日ランカシャーのプレストンで単独で政府軍と一戦を交えてしまった。死傷者は政府軍76に対しフォスター軍42と少数であったが、駆けつけた政府カーペンター軍に包囲されると、勝機を逸したと判断したフォスターは1500名の兵とともに11月14日に投降した。これにより1715年の乱は失敗に終わるのである。



Preston, Viscount, Richard Graham (1648-1695) — プレストン子爵、リチャード・グラハム

1675年から下院議員となり、1682年から外交官としても活躍し、1688年には国務大臣となる。プロテスタントであったがジェームズ2世を支持し、アイルランドに上陸したジェームズ軍への援軍を計画したジャコバイト。1689年に逮捕され死刑の判決を受けるが、共犯者と計画を密告したことによって特赦された。海軍司令官ダートマス卿は、彼の供述により1691年にロンドン塔で獄死した。



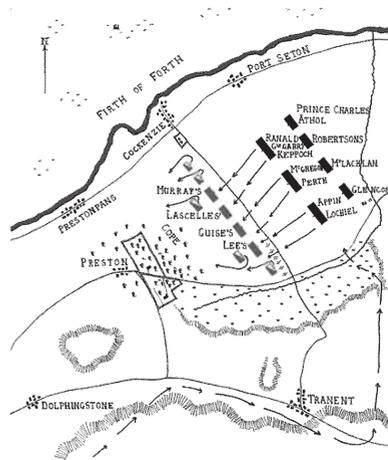
  **Prestonpans, Battle of, 21 September 1745** — プレ斯顿パンズの戦い

1745年7月25日スコットランド・ハイランドに上陸したチャールズ・エドワードがハイランドの族長に挙兵を願う手紙を送った結果、キャメロン氏族、ケボック氏族などからなる1200名のハイランダーが8月19日シール湖畔グレンフィナンでチャールズ軍の旗挙げに集まった。彼らは政府軍駐留のフォート・ウィリアム、フォート・オーガスタスを迂回し、ハイランド一揆鎮圧を目的に築かれたコリィヤリック峠道を逆上り、パース、スターリングを通りその間に軍勢を増加させ、9月17日無血のうちにエディンバラ入城を果たした。チャールズ軍の勢いは止まらず、9月21日エディンバラ近郊プレ斯顿パンズでスコットランド守備軍総司令官コープ將軍率いる政府軍を壊滅させ、スコットランドに橋頭堡を築いた。



右図はプレ斯顿パンズにおける当時の戦いを表したもの。チャールズ軍は狭い水路を利用して政府軍の背後に回り込む奇襲戦法をとった。

黒：チャールズ軍
 グレー：政府軍



 **Putteney, William, 1st Earl of Bath (1684-1764)** — 初代バース伯爵、ウィリアム・パルトニ

1705年から下院議員。若手ウィッグの論客として台頭し、一時ウォルポール派に身を置くが、ウィッグの和解後、重要な官職に就くことができなかったことを恨み、トーリと結託しウォルポールの論敵となった。1742年バース伯に叙され、ウォルポールと同時期に下院を退いた。1746年に組閣を求められたが、わずか2日で断念した。



 **Pyotr I Alekseevich (1671-1725)** — ピョートル大帝

10歳でロシア皇帝の座に就く。1696年に海軍を創設し、1700年からスウェーデンとの間でバルト海の覇権を巡る北方戦争を開始、1721年ニスタット条約を締結し勝利する。ロシアの西欧化改革を推進した。ジェームズ・エドワードに理解を寄せ援助を約していたが、1725年に泌尿器系感染症から壊疽を併発し死去し、その約束は果たされなかった。



ジャコバイト兵の帽子に飾られた白バラ。右はロサ・アルバ (Rosa Alba) で Jacobite Rose、Bonnie Prince Charlie's Rose の別名を持つ。バラ戦争で戦ったヨーク家の白バラともいわれている。



Q



Queen's Chapel of Saint James — クィーンズ・チャペル

ロンドン、セント・ジェームズ宮に付属したローマン・カトリック教会。1625年にチャールズ2世のカトリックの王妃、ヘンリエッタ・マリアのために建てられた。1688年10月15日ジェームズ2世の息子、ジェームズ・フランシス・エドワードの洗礼がここで執り行われた。



Queen, Jacobite — ジャコバイト女王号

1949年に製造された159人乗りの遊覧船。もとはタイン (Tyne) 川の渡しのフェリーであったが、現在ではインヴァネスから出発し、ネス湖、アーカイト城をめぐる Tomnahurich Bridge で下船し、バスでインヴァネスに戻るツアーに使用されている。





Queen, God Save the (King) (1745) — 神よ我らが女王(国王)

を救いたまえ

1745年9月ロンドンのドルリー・レーン劇場において演奏され、後に英国国歌となった曲。同年7月にスコットランドで挙兵したジャコバイト軍が、エディンバラ近郊のプレストンパンズにおいて、コープ將軍率いる政府軍を打ち破った直後のことである。この曲の編曲者はトーマス・アーネ(Thomas Augustine Arne, 1710-1778)とされているが、基となった曲はジャコバイトの側のものであったとの説もあり、実際1745年にジャコバイト軍が南下するなか、この'God Save The King(Queen)'はジャコバイトにも歌い継がれていった。この歌の歌詞には最終の第6節まで固有名詞はでてこない。第6節に初めて「ウェード將軍が反逆せしスコットランド人を打ち破る」という言葉があるが、1745年10月発行のジェントルメンズ・マガジンにはこの歌詞はなかった。また同時期ジャコバイトにより歌い継がれた第6節というものもあり、そこでは「God bless the Prince, Charlie」となっていたという。少なくともこの時までは「神に救われるべき英国国王」は、いまだ決していなかったのである。

552. *A Song for two Voices. As sung at both Playhouses.*

God save great Graces our king, Long live our noble king,
 God save the king, God save the king, Long live our noble king,
 God save the king, God save the king, Long live our noble king,
 God save the king, God save the king, Long live our noble king,
 God save the king, God save the king, Long live our noble king,
 God save the king, God save the king, Long live our noble king.

Long to reign o - ver us, God save the king.
 Long to reign o - ver us, God save the king.

O Lord our God with,
 Hasten his mercies,
 And make them fall;
 Confound their politics,
 Frustrate their knavish tricks,
 On him our hopes we fix,
 O God be with us.

They should give us peace,
 Or George be great as we;
 Long may he reign;
 May he defend our laws,
 And ever give us peace,
 To his will heart and voice,
 God save the king.

1745年10月15日の「The Gentleman's Magazine」に掲載された楽譜